2018年度 修了

おとなの示すみたて行動に対する幼児の反応の検討

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
武居　樹

本研究では，おとな（実験者）からのみたて行動を通した関わりに対する幼児の反応とその理解を検討した．井上(2010a)が提起した「個人内プロセス」と「個人間プロセス」の枠組みを参考に，1歳6か月から4歳5か月までの53名を対象として，①実験者がその意味を説明することなくみたて行動を提示する場面，②実験者がおこなったみたて行動と同じ行動の遂行を要求する場面，の両場面における，幼児の反応と素材への意味づけを検討した.分析1では2歳5か月から3歳5か月までの参加児(n＝22)を対象として,井上(2010a)との比較を行った．その結果，参加児が先にふり遊びをおこなう状況を扱った先行研究と比べて，実験者が先にみたて行動をおこなう本研究の状況は，参加児に抑制的な場面であることが示された．分析2では，全参加児（n＝53）を6つの年齢群に分け，結果の年齢的な推移を検討した．分析3では反応分析をおこない，分析2の結果から記述された各年齢群の特徴が個々の事例においても確認されるかを検討した．その結果，2歳後半群と3歳前半群で課題間の結果にばらつきが大きくなったあと，3歳後半群と4歳前半群で課題間の結果が収束することが示された．これらの結果から，2歳代は,「実験者の関わりを含めて，状況からの影響を受けやすい時期」であり，3歳代は,「みたて行動を理解するようになるものの，他者の意図に気づき始めることで抵抗が生じる時期」であると考察した．